

幻影の都市

室生犀星

青空文庫

かれは時には悩ましげな呉服店の広告画に描かれた殆ど普通の女と同じくらいのも、円い女の肉顔を人人が寝静まったところを見計つて壁に吊るしたりしながら、飽くこともなく凝視めるか、そうでなければ、やはり俗悪な何とかサイダアのこれも同じい広告画を壁に張りつけるかして、にがい煙草をふかすかでなければ冷たい酒を何時までも飲みつづけるのである。

かれは、わざと描かれたうす桃色の拙い色調のうちから誘われた、さまざまの記憶にうかんでくる女の肉線を、懊悩に掻き乱された頭に、それからそれへと思ひ浮べるのであった、それらの女の肉顔は何処で怎う見たことすら判明しないが、ただ、美しい女が有つところの湯気のような温かみが、かれの坐っているあたりの空気をしつとりとあぶらぐませ、和ませてくるのである。温泉町の入口にでもひよいと這入ったような気が、かれの頬や耳や胸もとをくすぐってくるのであった。かれの信じるところによれば、美しく肥えた女が特別な空気を惹き寄せるというより、皮膚や鼻孔や唇などが絶え間なく、そば近い空気をあたためているように思われるのである。

わけでも電車のなかや街路や商店の入口などで、はつとするほどの女の顔をみた瞬間か

ら、かれ自身が既^もうみずから呼吸するところの空気を、別なものに心でえがき、心で感じるからであつた。かれは第一に何故にそのハツとした気もちになるか、なぜ胸を小衝^{こづ}かれたような心もちになるか、そして又なぜに自分の視覚がその咄嗟^{とつさ}の間にどぎまぎして、いままでも眺めていたものを打棄^{うちちや}つて、急にその美しいものに飛び菟^{かか}つて見詰めなければならぬか、しかもその為^ために一時に断たれた視線が、その美しいものに追^すい縋^{すが}るまでの瞬間に仮令^{たとえ}一時的にも何故に麻痺するかということ、かれは髪^{かみ}のなかに手をつツ込むような苛^{いら}苛^{いら}しい氣持になつて考え沈むのであつた。こうしたかれは何よりその広告画の表面の色彩と肌地のいろが、かれの今まで眺めては消えてゆく女の、いろいろな特長をかれの眼底にすこしずつ甦^{よみが}えらしてくるのである。

かれの住むこの室^{へや}のそとは往来になつてゐるために、いつも雨戸は閉^とざされてゐるのであつた。しかも昼間は、広告画を始めとして、かれが蒐^{しゅう}集^{しゅう}したところの総^あゆる婦人雑誌や活動写真の絵葉書、ことに忌^{いま}わしげな桃色をした紙の種類、それからタオルや石鹼や石鹼入れなどが、みんな押入れのなかに収^{しま}われてあつた。かれは、ふしぎにも一枚の薄い竹紙のような紙のなかに、卑俗な女学雑誌の表紙に描かれた生々しい女の首や、貝のような手つきをまで忍ぶため、いちいち大切に秘蔵してゐるのであつた。しかもかれにとって

は猶^{なほ}充分な飲酒をも食^{むさば}ることのできない貧しさのために、かれはかれの内部に於て、それ自らの快樂をさぐりあてなければならなかつたのである。かれにとつてはこのあらゆる都會のうちにかれ自身を置くべきパンの住家はないばかりではなく、あらゆるものがかれとは背中合せであつたのである。それゆえかれは自分のうちに自分を次第にとも食いをするような生活をしなければならなかつたのであつた。

日ぐれころになると、^{あて}的もなくぶらりと街路へでかけて、いつまでも歩きつづけるのであつた。かれは何よりかれの住んでいる町裏から近い芸者屋の小路を、往来からふらふらと何かの匂いにつられた犬のようにぶらつきながら、きれいな鼻緒の下駄や雪駄^{せった}、それからそうしたところに必ずある大きな姿見に、これまた定^{きま}つたように帯を結んだり化粧をしたりする派手な女を、一軒ごとに見過すのがつねであつた。かれにとつては、そういう種類の女に近づいたこともなければ、また、そういう機会もあろう筈がなかつた。何かしら色紙でも剪^きつて作りあげたような擦れちがいの芸者などを、そば近く呼ぶものがこの世にあるうとさえ思えなかつたのである。ぐなぐな円つこいその手や足、いたずらに白いからだの凡^{すべ}ての部分、そういうものがただちに自由になるということ、その事実がいまもなお行われていることを考えると、かれは頭の至るところに或る疼痛^{とうつう}さえ感じるので

あつた。それほど、このきらびやかな待^{まち}合^{あい}の通りでは彼の着物がみすばらしく、溝^ど板^{いた}のような下駄をはいているのであつた。誰もかえり見るものもなく、また、知合いとてもないのである。

その通りは、すべての都会にあるような混乱された一区劃で、新^{しん}建^{だち}で、家そのもののさへ艶^{なま}めかしい匂いとつやとをもっているのであつた。ことに僅^{わず}かばかりの石燈籠に寒^{かん}竹^{ちく}をあしらったり、多摩川石を敷石のまわりに美しく敷き詰めたり、金燈籠^{かなどうろう}からちらつく灯は、毎夜の打水にすずしく浮んでいるのを眺めるごとに、かれは乞食のようにその敷石の上を思わず知らずとんとん踏んで見て、わずかに心遣^やりをするのであつたが。

「どなた！」と、まだ聞いたことのない卵のように円いなまめかしい声で呼ばれると、慌てて門へ馳^かけ出しながら、吻^{ほっ}と一^ひと息^{いき}つくのであつた。そのような僅^{ほほ}かな胸さわぎがいかに彼にとつて珍しく、むず痒^{がゆ}い快感によつて思わず知らず微笑^{ほほえ}みを泛^{うか}ばせたことであろう。ことにその小路に多い二階には、いつも影があつて女と男とがうつっていた。内部がしみりと何かの香料にでもつつまれているようで、ふうわりとした座布団や快い食卓、みぎきをかけたような一枚板のような畳、そこに菓子折のように美しく白い膝を折った女の坐り具合、などと悩ましく考えるごとに、かれはそこにふらふらとしている箱屋さえも、そ

れ自身が彼女等の日常にふれることによつて非常に幸福なようなものに思えたのである。

かれにとつて堪えがたいものは、その通りで聞くとおの何処から起つてくるとも分らない一種の女の肉声であつた。それは何の家から二階からも起るらしい艶めかしい笑い声と交つて、かれの喉すじを締めつけるような衝動的な調子でからみついてくるのであつた。

「おれはあの声をきくごとに、からだの何処かが疼いてくる。あの声はおれのからだじゅうを搔き探つておれの呼吸をまで窒めるのだ。」

かれは、そう何時もふしぎな女の肉声をきくごとに感じたのであつた。その肉声のなかには鴟のような啼き工合や、いきなり頬を舐め廻されるような甘い気持や、また、いきなり痒いところを尚痒くえぐるような毒々しきをもっていた。なかには、あたまの底までしんと静まり冴え返らせるような本能的な笑い声と交つていたのであつた。ともあれ、それらは悉く障子戸の内部から、あるいは雨戸越しに遠くきこえたりするのであつた。

それから最う一つは、かれと擦れちがいにあるく女らが、どういう時でも必ず一度はこういう種類の女にありがちな一瞥を施してくれることで、そのため彼はどれだけ暗い往来で、ふいに花をぶつけられたように慌てたことであつたか判らない。どの女らも決つた

ように鼻や唇や耳にくらべてその目つきが伶俐りこうげに黒黒と据えられていて、ひと目投げると対手あいての足さきから頭のさきまで見とどける周到な働きと迅速な解剖的視覚をもっているのであった。何かの黒漆こくしつな虫、とくに何ものでない異常の光、その冷たそうに素早く輝くものが、いつもかれに一滴の得体の知れないものを注いでいた。それがかれにとって理由なく嬉しかったのである。しかし、かれにそがれる目つきは、なかばは卑しげなものを見下すひかりで、なかばは、こういう界限はあなたがたのくるところでないという叱しっせ責きさえも加わっているようであつた。かれはそのためあかに赧あかくなつて溝板のような下駄の音を忍んであるくのであつた。

こうした毎夜のような彼の彷徨ほうこうは、ついにふしぎな或る挿話をいつごろとなく彼の耳にいられた。その何より先に、かれが一度ばかりでなく数度も、そのふしぎな娘とも女中ともつかない女を見たのであつた。

ある蒼白い冬の晩であつたが、はしなく人人が馳はしるので何心なく近づくと、有名な女でみんなは「電気娘」と呼んでいたのが歩いてゆくのであつた。おもにこの界限の使いあるきや、大掃除の手つだいなどをして歩いていた。いつか彼女が金か何か盗んだときに、みんなで捕まえようとしたが、彼女の肩や手に手をふれると、異様なエレクトリックの顫せんど

動をかんじると同時に、とくに変な悪寒さえ感じたのであった。それでも皆でぐるぐる巻きに縄をつけたが、どれだけ巻いても、するすると抜け落ちるか、ふしぎにも途中で切れてしまうのである。しまいには皆が気味悪くなつて、もう二度と彼女を追うものさえいかなかった。かの女は老婆と一しよに住んでいたが、それから後も忙しい家族の手伝いに次から次へと傭やとわれていた。ただ、おかしいことには三度おんぶした子供が三度とも窒息してしまつたことで、医師に診させると、別に外部からどうということがない。唯女の肉体にはげしい鰻や夜光虫などの持つ電気性が多いとかで、それが決して彼女自身の内部にあるときは有害ではないということであつた。ただ、

「その子供の種類にも依るし、彼女の電気性に摩擦力を与えるもののみが危険であるようだ。」とだけで、医師もくわしいことは説明しなかつたのである。それ以来、かの女が子供を負つたことを見たことがなかつた。

かれはこのふしぎな女に、よくその小路で出会うごとに何日かは話をしようと思つていた。女はいつも風呂敷包みをもつていたり、巻煙草をかいに出かけたり、車を呼びに行つたりしていた。はじめのうちは彼女は彼をうすきみ悪く眺めていたが、このごろになつて微笑わらつて通つてゆくようなことがあつた。実際、かの女が何かの樹木に（その木は何とい

うのであったか忘れた。つかまつたとき、樹木がいちどきに震えたといわれたことや、ある家では食卓をたたもうとして、突然に、食卓に感電したことであった。

かれは第一に彼女が驚くべき蒼白い皮膚をしているのを見逃がさなかったばかりではなく、その蒼白さは年の若いせいもあるが、極めて肉付きがゆるやかで、その上肥えた色白な女が有つよううつつりした冷たささえ感じるのであった。概して皮膚の冷たさには、内部の皮膚生活が枯れきったそれと、また、脂肪それ自らによつて肉付きが冷たくなつてゐるのと二た通りあるが、かの女はその後者であつて、いつも、くつきりした蒼白さは可なり成な冷たさをもつていたのである。かれの考えるところに拠るとこのふしぎな女の皮膚の蒼白さには、どこか瓦斯とか電燈とかにみるような光がつや消しになつて含まれていて、ときには鉱物のような冷たさを持ち、または魚族のふくんでいるような冷たさをもつてゐるようにながめられたのである。

それゆえかれは何よりも彼女を街燈の下でなければ、商店の瓦斯の光で眺めることを好んでいたのである。かれの異常な、殆ど説明しがたい物好きはかの女に一瞥をあたえるごとに、その皮膚の蒼白さにぴたりと眼球を蓋されたような悩ましさを感じるものであった。たとえば、その洋紙のような白みに何時もうつつりとあぶらぐんだ冷たそうな光は、形よ

く整った鼻を中心にして、鼻の両側から少しずつ蒼白さを強めて、最後の鼻のさきの方で、いつも一と光りつるりと往來の灯を反射しているのであった。ともあれ、これらの驚くべき、また多少氣味悪い皮膚は、かの女の憑きもののように言われている電気性と一しよに、この界限のひとびとから一種のふしぎな徴候として眺められていたのである。綺倆きりようは決して悪くはない。ただ余りに鮮やかに白すぎる顔面に、あまりに生きのいい黒ずんだ目が翳かげされていることで、なおよく見れば決して黒目が黒目ではなく、むしろ茶褐な瞳孔で、その奥の方に水の上に走るまいまい虫のような瞳すわが据すわっていることが、なお彼女をえたいの分らない女としていた。そこまで彼女を見究めるなれば、遂にその皮膚のこまか過ぎる点や、産毛の異常に繁毛しているのや、白すぎる色あいや、ところどころにどうかすると痣あざのような影をもっていること（しかしそれは彼女の顔を側面から見たりするときに、ふいに痣のようなものを見るが、氣をつけると決してそれがあざではないようである。）などが、かれにとつては益ます益ますおかしな疑いをもたすのである。それは果して彼女が日本人であるかないかという疑問で、ひよつとすると、外国人の種子をもつてはいはすまいかということである。

と言つても彼女は決して雜種児としての条件的相貌の全部をもっていないのである。日

本語の巧みなことや、髪の毛のやや黒いこと（しかしそれは日光などの当たっているときに見ると、殆ど茶いろに近いのだ。）ことに彼女の母親であるといわれている馬道の裏二階に住んでいる老婆が純日本人であることなどを取り併せると、雑種児ではないようにも思えるのである。しかし、ここに疑問とすべきは、彼女の身体つきが非常にがっしりとしていることと、背丈の高いこと、そして骨盤のあたりが殆ど西洋人にくらべても遜色ないこと等である。いつも、すらりと足早にあるいてゆく彼女の長い足つきは、そのまま踵の高い女靴をはかせ、その上、スカートを着けてみたなれば決して見劣りのない西洋人のように見えることである。その歩きぶりは其等の凡ての条件を全うすべき資格をもっているのである。彼女はすらりすらりと歩きながら八百屋の角や小路の曲り目などでは、凡ての西洋人の持つところの軽快な歩行と、しかもかなりな繊細さをもつてくると八百屋の角をまがってゆくことである。かの女のちぢれ毛がそのときは実によい調和をあたえるのである。もしその小さい風呂敷包みを手に持つことなく、日本風な汚ない着物をつけていなかったとしたら、かの女はすっかり西洋人のように見えたにちがいない。

しかもかれは暗い小路から突然に出てきた彼女に会うごとに幾度驚きを新たにしたことであろう。それは紛う方もない一人の西洋人が暗にまみれて歩きつづめているような気が

するのであった。スカートのあたりからあおられるともない優しい風さえ、かれの神経をおのかせたのである。それに彼の界限にあるふしぎな十二層の煉瓦塔れんがとうが、夜夜かの女のあやしい姿と、最う一つはかれ自身の目の前に、あるときは黒ずんで立ち、あるときは星を貫いて立つているのである。その窓窓はいつも閉ざれてあったが、眺めているうちに不思議にいろいろな想念に悩み織りこんでくる古い塔の尖端に、かれは毎夜のようにかれの伝奇的興趣でんきてききょうしゆをそそるような星座を見出すのであった。かれは何故にふしぎな女とこの変な煉瓦塔とをむすびつけて考えたことであるかは分らないが、それら二者を離しては、もう彼女というものを完全に考え出すこともできなかったからである。

かれがこの女の奇声ともいわるべき声をきいたのは、その晩がはじめてであった。かれはいつものように町から町をあるきつづめ、この都会の濶よとんでカスばかり溜ためつた小路をあるきながら、例によって何等なんらの感銘もなく、ただ徒いたずらに歩行するだけの毎夜の疲労にとぼとぼ歩いていたとき、例によって何処から何処と何の用事があつて往来するかわからない群衆からはなれたときに、かれは、ふいに彼女が暗い小路からでてくるのに出会したので

ある。

誰でもそうであろうか余り度度出会すときは、意志のない振り顧^{かえ}りをやるものである。彼女はそのときも例によつてかれの顔を凝視しながら忙しげに往来へ出て行つた。かれはその背後姿^{うしろ}を見つめたときに、いつもの暗い屋上に積みかさねられた塔を目に入れ、また彼女の足早な姿を目にいらしたのである。かれは何のために毎夜のように歩くのか、そして歩かなければ眠れない遊惰と過剰された時間は、ただに疲労のみが眠りを誘うにすぎなかつたのである。また、決して彼女と話をしようという気もおこらなかつたのである。なぜかといえ、かれがそういう界限の家の二階や下座敷^{とこ}の灯^{とも}れているのを眺めて居れば、かれ自身も何かしらそれらのものから、むずがゆい聯^{れん}想^{そう}と、れいの時時おこる肉声^{くすぐ}のなまめかしい声音によつて、かれのあらゆるものを擦^{くす}られる感覺的愉樂をとり入れることができたからである。それがため、かれは例の忌わしい広告画を押入れにしまつて、宿を出ると、いつも騒騒しい樂隊や喧^{けん}擾^{じょう}や食物や淫^{いん}逸^{いつ}な巷^{ちまた}の裏から裏を這いありく犬のように身すばらしくぶらつくのであつた。

かれはそのとき何をきいたか。また、どうという言葉の意味であつたか判らないが、突然呼び止められたことは實際であつた。

かれの前には、異様な色白な彼女が佇^{たたず}んでいたのであった。片側はしもた屋になり、片側から軒燈が漏れていて、蒼白い彼女の皮膚をいよいよ冴えた蒼白さに射かえして、くつきりと夜のくらみを劃^{くぎ}つた上に、むしろ重く空中に浮いてみえたのである。

「わたしを呼んだのは君かね。いま何か言つて呼んだのは――。」

かれはそう言いながら、彼女の黒ずんだ目をみつめた。それは瞬^{またた}きもせず、むしろ猫のようなあやしい光をたたえていた。何か言おうとしながら、手に風呂敷包みをもったまま、むしろぼんやりとした視線をかれにそそいでいた。

「たしかにわたしを呼んだのは君だとおもうが……。」

かれは又そう言いながら「しかし間違いかも知れない。あの女がわたしを呼ぶわけがない。」しかしかれは殆ど奇声にも近い声をきいたことは実際である。

「いえ。わたしではございませんわ。わたしは……。」

彼女はそのとき不審そうにかれを見つめた。かの女にはこういう他人から呼び止められた経験に乏しいらしかつたのであろう。その顔いろはいくらか慌てていた。かれは初めて蒼白い皮膚がその表情の雑多に富んでいるということを見て取った。

「そうですか。どうか構わないで行つて下さい。べつに用事がないんですから。」

かれはそう言つて、かの女に道をゆずろうとしたとき、彼女の目が素早くかれの額に投げつけられた、それは目のなかで瞳をひと廻りさせたような素早さで、むしろ艶めかしい匂いをもっていたのである。決して日本の女にはできない多くの外国の女らが持つところの大きな瞳とその表情であつたからである。

「ではごめんなさいまし。」

そう言つて腰をかがめ、かがめた腰をあげたときに上目をしながら、じろりと柔らかく一と目見て足早にあるいて行つた。かれはそのとき一いったい体何をきいたのであろうか、あの女の声でないとすれば、かれは誰から呼び立てられたのであろうかと考えながら、ぶらぶら歩いていた。

かれはこの巷に於けるさまざま汚ない酒場やカフェ、飲食店などの併ならんでいる通りがあるくごとに、それらを包む夜のそらをながめながら、その公園にうとうと一と眠りをするか、でなければ、必ず毎夜のように一時間余も同じところに客待ちをしている自動車の側面に、追い立てを食わないばかりの安逸さを、わずかな時間を偷ぬすんで眠る人人のむれを見た。または泥にはまり込んで腰から下が水気で腫はれた毎夜の乞食が、どこからどう消えてゆくか分らないが、集まつては消え失せてゆくのを見た。

かれは昼間も、この騒々しい公園の池のほとりに置かれたベンチの上に坐っていた。かれが二度目に例のふしぎな女を見かけたのは、この池のまわりであったのである。

殆どいのように、このベンチに集まるひとびとは、みな疲れ込んで、なりも汚れていたし、顔という顔には当然現われるべき疲労と倦怠、つぎには悲しげな苛苛した貧しさをたたえていたのである。あるものは、電車の乗^{のり}かえ切符を手にもちながら、それをどれだけ細かく引裂けるものであるかということを試すもののように、タテに裂いたり横にちぎったりしながら、ぼんやり池一つへだてて通りを眺めているものもいたし、なかには^{あご}つきを膝の上でやりながらぼんやり失神したように或一点をながめくらしているものも居た。なかには講談をよんでいるのも居たが、どれもこれも、となり合ったベンチの上にながら、お互いに話をしようとするものがなかった。そういうことに興味をもたないもののように見えた。かれらは、お互いに人目を盗んでは煙草をひろい合うか、べつに何ごとかを深く考え込んで、根が生えて立てないようにも見えた。

かれは、そこにある池のなかにいる埃と煤^{すす}だらけの鯉をながめていた。かれはどういうものか、これらの魚族が決して生きているもののように思えなかったのである。俗悪な活動の絵看板の色彩が雨にでも流れ込んだものでなければ、ふしぎに、紙作りでもされたも

ののように、わけてもあやしい緋の鯉や蒼いを見つめた。かれらは懶げに、よどみ込んだぬらぬらした池水を重たげに泳ぎ、底泥につかれたようなからだを水の上にあらわし、ぼつかりと外気をひと息に吸うのであった。空気は、そうぞうしい人人の埃と煤と雑音とによごれて、灰ばんで池の上に垂れていた。しかも、そこには、幾千ということない看客を呑みこんでいる建物が、さかさまにそのボール製の窓窓と、窓窓をさし覗く腰のまるい女らの姿をうつしていたのである。あるものは悩ましげな藍いろの半洋服で、あるものは膝よりも白い頸をさしつらぬいて、蒼蒼した水の上に、何らの波紋もなく、しんとして映っているのであった。日かげは、これらの高層な建物のうしろにつづく大通りの屋根屋根の上にかがやいているらしく、その為めななめに陰られて、ベンチの上の悲しげな蒼白い相貌をなお一層憂鬱に、かつ懶げに映し出しているのであった。かれのからだにも日の光はあたたかに当たっていた。

池のなかばにも日があたっていた。かれらの悲しげな泳ぎは温かい方へ、その明るみに舞うところの微塵はみな水の上におちて行った。風船玉の破れや、活動のプログラムを丸めたのや、果物の皮、または半分に引きさかれた活動女優の絵はがき、そういうものが岸の方へみな波打ちに寄せられ、あるかないかのさざなみに浮んでいた。哀しげなアニタ

・スチュワートの白白い微笑んだ絵はがきが、かれの方から濡れたまま、日の光のまにまに浮いて見えたのであった。かれはそれを見るときにもなく眺めているうち、ふしぎにその印刷紙の蒼白い皮膚が濡れているために、ふいに、れいの女のことを思い出した。

「ちようど、ああいう風な蒼白さで、そして何時もすらりと歩いているのだ。よく似ている。さびしげな頬のあたりが、ほとんど彼女にそっくりだと言ってもいい。」

かれがそういう思いに充たされているときに、不意に、赤い鯉が池のそこから浮びあがってきて、何かを吸いこんで、はつきりともんどり打って再び水中にかくれた。そのとき、かれは緋鯉の丸っこい胴体が振^ねじられて、彎^{わん}曲^{きよく}されて滑らかに露^{あら}われたのをみた。それはかれには、婉然^{えんぜん}として円みのある胴体ばかりでない、美しいある咄嗟の幻想に似ない込んだのであった。みればあたりの水は濁り、ひっそりとして彼女のすがたは消え失せたのであったが、水面に浮んだ分の体がちらと光ったままで、かれの視覚にもつれついで中^{なかなか}離れなかった。

ひよいと見ると、かれの正面の××館の看板絵にもなまなましいペンキ絵の女の顔が、するどく光った短刀を咥^{くわ}えて、みだれた髪のまま立っているものであった。その唇の紅さ、頬の蒼白さ、病的にばらばらに、かれの頬のあたりまで靡^{なび}いてくるような髪^{うるさ}の毛の煩さを

感じながら、かれは飽くこともなく見つめたのである。かれは、そういう一切の光景のうちに、病みわずらうたかれの性的な発作がだんだんに平常のかれ以上のかれに惹き上げつつあるのであった。かれにとつて、もはや一切の流旗や看板絵や、わずかに棄てられたアニタ・スチュワードや、鯉の胴体や、なやましげに紫紺の羽織をきた女や、下駄ずれの音や、しぶとく垂れている柳や、さては、そこにある交番の巡査のさびしげな赤い肩章まで、かれのからだに響き立てて、一種の花のようにむら咲きをはじめたのであった。それと反対にかれの顔面は荒んだような上乾きをしてゆき、悲しげな鼻翼の線を深めるばかりであった。

「おれは彼の鯉の胴体をすっかり心ゆくまで搦んで見たい願いをもっている。あれが不思議な冷たい生きものであるか。単にそれだけのものであるか、それとも柔らかい名状しがたい別な生きものであり、そしてその搦んで見ることによって何等かの愉楽を感じ得るものであるか、ともあれ、あれのからだには様様なものの感覚が、この混鬧の巷のうちの何かが潜んではいまいか。」

かれの恚^こういう詰らない考えは、殆ど熱病のようにかれのからだのなかに広がってゆくのであった。埃と煤と紙きれと。またそれらにまみれた空気よりしかないこの池、あやし

げな一切の影をうつす水の面、そのなかには、かれ自身さえ知ることのできないものが有り得るもののように思えた。三年に一度ずつの底^{そこより}浚いにはふしぎにも幾つものダイヤモンドの指輪と、ほかに又純金の指輪が必ず落されているということや、銀貨が沈められていることや、その他に純金細工の櫛やかんざしや珊瑚^{さんごだま}珠や、ときとすると不思議な絵画が幾束となく固く封じられて底深く沈められてあることや、男と女との人形が固く両方から縛められ、^{おもり}錘をつけられかつ呪われたままで泥底のなかに沈みこんでいることなどがあつた。あらゆるこの都会の底の底の忌わしげな情痴の働きが、なおかつこの水中のなかに春のように濃く、あるものは燦^{さんぜん}然と輝いて沈められてあるのであつた。夜は夜について蒼く明けきらないうちに、いかにそこは諸諸のものが棄てられ沈められることであつたろう。かれは、これらの考えから、水とはいえない一種のあぶらのような水面をなお永くふしぎなものを見詰めるように眺めるのであつた。

そのときうつすりと日が陰つたような気がした。が、実はそうではなく、五六間さきに一人の女が歩いてゆくのが見られた。はつとする間もなく、彼女は、すぐかれを見つけると何気なく、すなおに微笑んだのである。そのときかれは殆ど夜ばかり往来で見た彼女の皮膚が、日光に透いて見えて、いかに白く明確に輪廓づけられたものであるかを初めて知

つたのである。それは貝類の肌のような白みのなかに稍^{やや}うつすりしたオレンヂいろを交ぜたような光沢をもったところの、殆ど、日本人としては稀に見る皮膚の純白さをもっていたのである。之^{しか}加^も夜、やや褐いろに近いと思えた目は紛うかたもない藍^{あざ}ばんだ黒さで、両側の長い睫毛^{まつげ}に蔽^{おほ}われていて、あだかも澄んだ蒼い池のまわりの蘆荻^{あしき}の茂みのようで、しかもゆつくりした光をもつて、しずかに、かれの視線を見返したのであった。

この不思議の女は、まがう方もない雑種児であることを感じたのである。かれはその微笑をほとんど咄嗟の間に返すと、かの女もすぐさま又返してきたのである。何かの買いのをした帰りであろう、風呂敷包みを有ちながら、裾を蹴散らして歩く背高い姿はひとびとの目を惹いたのである。かの女は足早に往来へ出て行ったが、その異常に白い頸首^{くび}ははつきりとかれの目に挟^{えぐ}り込まれてつツ立っていた。

そのときかれの疲れた耳もとで、誰かが物うげな声でささやくのが聴えた。それほど彼女の姿はひとびとの目につき、また彼女自身がそれほど有名なものになっていたのである。かれは耳を立てたとき、うしろのベンチで囁^{ささや}きはふたたび起つたのである。

「あの女は電気をからだに持っているんだそうだ。何をするか分らない。得体の知れない女だそうだ。」

と、言うのがきこえた。にぶい虻のように疲れた声であつた。

「どういふ風に電氣があるのだ。そんなものが人間のからだにある筈がないじゃないか。」
別な声がいうと、さきの声が再^{また}これに答えた。

「あの女がね。樹なんぞ揺^ゆぶると、樹がガタガタ震えるのだ。ふしぎに子供を^{おぶ}負さすと何時の間にか窒息してしまうのだそうさ。だから彼^あの女はできるだけ電燈のそばに坐つたり歩いたりなぞしないそうさ。いつも暗いところばかり撰^よつて歩くのだそうさ。」

と言つたときに、彼女の姿はもう人込みに揉み消されてしまつていた。

「そんな不思議な女がいまどき居るものかね。」

感嘆したような声がつづくと、

「一種のああいふ病氣なんだよ。あの変に白っぽい顔色を見ても何かの病持ちだということとが判るじゃないか。」

と、さきのだるい声がぜいぜい続いたのである。かれはしばらくすると、そのベンチを離れた。

そのとき日の光は、人家の屋根の上にななめにさしていた。冬近く、黄ばんだ夕方ちかい光線は、あらわに二階家の内部や、商店や飲酒店の暖簾をそめていた。この巷にきて、

これらの光線を見ることは、いつも彼にとつては堪えがたい^{りようりよう}寥々とした気持ちに陥らせ
るのであった。かれが観音堂の裏あたりへきたとき、うしろから来た男が何か言いたげに、
うそうそと影のようにつき纏^{まと}っていることを見いだしたのである。

かれは、若い銀杏の木の下に來たとき、その男は、低い声で、すれすれに寄つてささ
やいた。

「あなたは電車の切符をおもちでしょうか。実は……。」
と言いかけて、かれは藍色した切符を一枚取り出した。

「これをあなたに買つていただきたいと思ひましてお願いしたんです。わたしはまだ何も
食わないんです。けさから……。」

かれは、その男のよれよれになつた単衣^{ひとえ}と古下駄と、この都会を絶えず彷徨しているも
ののみに見る浅黒い皮膚とを目にいれた。けれどもかれはまだ黙つて、睡眠不足らしいか
れの目をみつめた。

かれは内懷^{うちぶとこころ}中から一枚の銀貨をつまみ出すと、やはり低い声で、

「お困りでしょうに——これだけあるから使つて下さい。」

そう言つて、男の手のひらに銀貨をのせたのである。男は幾度も礼を言つてしつこく切

符をかれにわたそうとした。

「それは要りませんよ。そんな心配はしないで下さい。」と言いながら、かれはくると踵を見せてあるき出した。

かれは、かれの背後で浅猿あさましくも幾度となく挨拶をいう男の声をききながら、忌わしさのために、自分自身のしたことについて或る不愉快な憎しみを抱きながら歩いていた。何処から何処となく、町角に出るかと思うと、とある飲食店の内部に、さむぎむとかれは夕食をしたためていたりしていた。

かれは其処そこでさまざまな人人を見た。それは、当時に流行はやった小唄をヴァイオリンに併せて弾いたりする卑俗な街頭音楽者のむれであつた。かれらは、吉原に近い土手裏の湿じめ湿めた掘立小屋のような木賃に、蛆うじのように蠢うごめきながら、朝から晩まで唄いつづけていたのであつた。かれがふとしたことから、その木賃をたずねたときは、午後三時ころの斜陽が、煤と埃とボロにまみれた六畳の、黒ずんだ畳の上をあかね色に悲しげに射していた。

音楽者らは、みなヴァイオリンを一日十銭ずつに賃借りをしていた上に、糸や楽器の破損は凡て自分持ちにしていたのである。手垢にまみれた楽器はどれだけの人人の手に触れ

たか分らないほど黒ずんだ光沢をもつて、胴の中はおびただしい埃にまみれていたのである。かれが其処に凡ての人人がするように、ぶらりと這入ると、すぐ紹介された。歳太郎というかれの郷里から出てきた古い友人が、かれを時時脅して電車賃などを持って行ったが、しまいには、かれをそこに紹介してくれたのである。

そこには四人の青年がいたが、みな一樣に日焼けをしていた上に、栄養不良らしい蒼白い皮膚をしていた。昼間は、ときどき万年町の元締もとじめからくる毎日の新しい小唄を予習することに趁おわれていたが、もとよりメロディばかりを弾くのであるから、それほど困難ではなかった。ひとり唄えば、ひとり弾きながら、

洋燈ランブさん、わたしあなたに、

ほやほや惚れた——

心しんのあるのを見て惚れた——。

と、悲しげな皺枯れ荒んだ声でうたうのである。かれは、三人ともみな魚のような大きな口をあけて、うすぐらい室でうたい出すのをきいていると、本願寺の境内のくらやみや、公園の隅隅、それから町裏などに歌つてゐる帽子をも冠らない浮浪人のむれを思い出すのであった。その声は、変に破れて浮ずつたような喉声で、永ながくきいてるとひとりでに心が

荒みながら沈んでゆくような気がするのである。わけでも折釘にぶら下げた垢まみれの着物やシャツや帽子や、蠅の糞でくろずんでいる天井、すぐ窓さきに隣の廁にひきつづいた湿っぽい腐った板囲い、それから次第に天井の方へ這いあがつてゆく一くれの日かげの寂しき、そういうものが悉くかれの声音とよく調和されて何時までもつづくのであった。

ほやほや惚れた、れた……

と、きいきい軋むヴアイオリンが、同じメロディを幾度となく繰りかえされながら、うたわれるのであった。

かれは、歳太郎が手に持っている薄い印刷物を借りてよむと、そこには小唄が十種ばかり書いてあつて、定価がつけられてあつた。それらの印刷物は万年町の元締から「卸し」にされて、例の街頭で売り捌くことになつていたのであつた。

「この小唄を作る男に会いましたが、早稲田を途中でやめてこの方を専門にやっているんですよ。やはり原稿料みたいになつていらんです。絶えず新しい作ばかりを節づけているんですよ。」

歳太郎は、その男が現にこの原稿ばかりで食っていることや、東京で唄われる流行歌はみなその男が作ることなどを話した。そして、

「大阪と京都へもわざわざ旅費をつかって出かけるんですよ。それがつまり東京を振り出しにして横浜までの旅費さえあれば、ヴァイオリンを一挺ちよう持って、町町で唄ってはこの刷り物売って歩けば大阪へでも京都へでも行けるんです。」

と言って沢山の刷り物を二つ折りにしては重ねていた。仲間らしい青年がさつきからじろじろ見ていたが、

「あなたは美術家ですか。」

かれは慌ててそうでないと云ったのである。ところが歳太郎はすぐ口をきつて、

「この人は詩をかくんだから、小唄などは何でもないんだ。書いて貰うといい。」と云つて、

「君、何か一つかいてやってくれませんか三四十行の奴を——。」と云ったのである。するとその男は、

「詩っていうのは新体詩のことですか。万年町の小唄の作者も詩がうまいんだという話ですよ。」

そう言いながら「わたしも文学希望で田舎から出てきたんですけれど、とうとう、こんな処へ陥り込んだのですよ。はま T先生 S先生にもお会いしたことがありますよ。あのころか

らずつとやって居れば、今頃はどうかになっていたかも知れないがなあ。」

関西なまりで言うのと、そばにいたヴァイオリン弾きが笑い出して、肩から楽器をおろしながら皮肉そうに、

「こんな男が君何をやったつて出来るのですかね。木賃にごろごろしているより外に能のない男ですよ。なにかの癖にああして泣^{なきこと}言をいいますかね。」と、決るような浮いた調子で言つて「僕なんでも三度も音楽学校の試験に落第したものですよ。学校のなかの芝草の生えたところがあるでしょう。あそこで胸をどきつかせながら試験場へ這入つて行つたものです。けれども、それも今は話の種でさ。」自分で自分を卑下するように、からからと笑つた。すると、さっきの男が、じつと見つめていたが、

「嘘を吐^つけ、君が音楽学校の試験などを受ける資格があるものかね。第一、中学は卒^おえていないし、英語はビールのレッテルも読めないじゃないか。」

ヴァイオリン弾きはすぐ赤くなつて、唇を噛んで慌てて赤くなつた顔の遣り場に困つたらしくどぎまぎしたが「馬鹿を言え。きさまなんぞに音楽学校のことを言つたつて分るものか、そのころ勉強した音程の本なぞ皆ちゃんと今でも持っているんだ。」

そう少し蒼ざめながらいうと、さきの男は追いかけるように、

「じゃ拝見しましょうかね。音程の本がきいて呆れらあだ。」と毒づいて、気短かそうに煙草に火をつけていた。歳太郎がそばから、

「詰らないことを言わないで今夜のやつを練習しなければものにならないよ。日がだいぶ詰ったじゃないか。」と、年としがしら頭だけにそう言うのと、ぐずぐず言いながら、「君、ちよいと失礼します。」と言つて、また大きな口を開けながら、長長と歌いはじめるのであつた。いちように大きく開けた口もと、そのきたない歯並、それらはただ機械的にすぼがったり開けられたりした。どこか哀調をふくんだところではわざと目をほそめ、額にしわを寄せながら泣くような声を出すのであつた。

「楽器などがないと思つて大きな声でうたえよ。低くつていけない。」

と、ヴァイオリン弾きがどやしつけるように叫ぶと、さきの男もぶつきら棒に叩きつけるように怒鳴どなつた。

「ヴァイオリンのような高い声などが人間に出るものか。」

「そこを出すのがいいのじゃないか。ヴァイオリンは今の場合伴奏にすぎないんだよ、伴奏なんだよ。」

と遣り込めると、さきの男は、

「伴奏というのは別の曲を弾くことなんだ。メロディばかりじゃないか。」と、これも唱いながら噛みつくように喚わめいた。

「生意氣をいうな。——そら間違つた。もつと長く引くんだ。ほやほや惚れた——とこういう風に」。

ヴァイオリン弾きは、かれを横目で見ながら、決してこの男などに負ひけをとらないという暗示を与えるようにツケツケ叫ぶのであつた。

歳太郎は黙っていたが、さすが子供のときからの友だちの前で唾いがみ合っている仲間を見られた極まり悪さに陰気になつて考え込んでいた。

「こんな口くちあらそ 諍しやういは毎日なんです。どうにもならないんですからね。」

歳太郎は子供のときから明みんてき笛や流行唄などを上手うまくうたつたが、こんな処へ墜ちてきた自分をいつもかれの前では蔑さげすんでいたのである。

「どちらでも同じことなんだよ。僕なんぞも君らのような仕事さえできなくてのらくらしているんですよ。」と、彼は彼で低い沈んだ声で囁くのであつた。

「だつて為するにも事欠いて唄うたいなんですからね。」と言いながら、軽く思い上つたような調子で、

「食うには食えるですよ。別に人さまに頭を垂げなければならぬこともありませんしね。行き当りばったりで氣に入つたところで唄つていさえすればいいですよ。それだけ取りどころです。」と、歳太郎は言つて安心したような顔になつたが、「これで雨の十日も降られると、どうにもならなくなるんですよ。そと稼ぎはできないしね。蛆のように此処ここでねころんでいるんです。そんなときになると君などと遊んだ郷里の町などを考え出しましてね。あれはどうしたろうなどと思ひ出すんですよ。」と、三十近い能なしのかれは、眉根の薄くなるような寂しい顔をするのであつた。

かれは先刻から室の隅に色白な少年が、じつと坐つたきりで少しも動かないでいるのを偷み見ていた。皆のあとにつきながら、口をもがもがさせていたが、少年の声音だけが皆の荒れたのにくらべて、なま若く不調和な高い調子になるので、すこし唄つては止め、そうしては居られなさそうに又急に、へんに跳ねあがるような声で唄つていた。そうしては時時かれの方を眺めながら、かれの視線に出会すとあわてて視線を外らし、いくらか惶あわてて声をへどもどさせるのである。それらの調子がどうしても最近にこの仲間に入つてきたものと思えなかつた。それに少年の顔は他の仲間にくらべて、まだ滑らかな悪ずれのない若若しい光沢をもっているのであつた。

かれはそつと歳太郎の耳のもとで、

「あの少年はどうしたのかね。こんなところへ来るものとも思えないようだが……。」

そう問うと歳太郎もちよいと一瞥しながら低い声で「あの少年ですか。あれは。」と一層声をひくめて、

「一週間ほど前に自分から進んでやって来たんですよ。田舎から出てきたらしいんだが、やはり種^{いろいろ}種仕事を搜したが無いんで此処へやってきたらしいんですよ。それでも（君は将来はどうするのかね。）と尋ねると（昼間は学校へ行つて苦学をしたいんです。晩はどんなことをしたっていいんです。）と言うんですが、誰でも始めは皆そうなんですが、しまいにには怎うにも慫うにもなくなつて了うんですよ。ああして居るもののちゃんと私にはどんな人間になるかが解るような気がするんです。いまはああやって恥かしそうにしていますかね。」

歳太郎はやや自信あるらしい調子で言っているうちにも、少年は自分のことを話されている不安な予覚のためにこちらの方をじろじろ眺めていた。

「では最う街で唄い出すのかね。あれでは物にならないだろうが。」というと、

「まだ恥かしがつているんですが、なあに二週間も経てばすぐですよ。それも一度街で唄

えばもうしめたものです。どこまでも厚^{あつかま}面しくならなければなりませんからね。巡查がやかましく追っ払いますからね。考えて見ると厭な商売ですよ。」

歳太郎はすっかり刷り物を揃えてしまうと、懷中瓦斯とサイダアの瓶に湯ざましを詰めこんで、小さな風呂敷包みのなかに入れた。

「サイダアの瓶はどうするかね。」と問うと、

「唄っているうちは喉が渇くでしょう。それで用意して行くんです。」

歳太郎は、はははと寂しく笑った。他の連中も練習が済むと、みな刷り物と懷中瓦斯とをひと包みにした。さきの少年はむんずりと立つと、自分の分と、連れられてゆく歳太郎の分とを土間の板の上にならべ、みんなの下駄をそろえた。

そのときは室内にも外にも陰つて、うそ寒げな夕方の空気があたりを這いはじめていた。ヴァイオリン弾きは木綿の袋に楽器を入れると、それを抱えて、さっきの口争いをもけろりと忘れたようにして、

「さあ出掛けよう、君はゆっくりしていらして下さい。」と言いながら「なにを愚^ぐ図^ずしているんだ。出かけよう。」と、さっきの男に言った。さきの男は青いボール箱から兩^{りょうぎり}切^ぎを出す^しと火をつけて、かれに挨拶がわりに何か言いながら、二人とも素足のまま

古下駄をひツかけて出て行つた。二人とも同じい背丈で、どこか似たような寒げな埃ばんだ背後姿をしていた。

「君もそろそろ出かけるんだろう。」というと、

「そろそろ出かけなければ……」と言つて立ちあがつた。少年はヴァイオリンと刷り物を抱えて、まだ何処か可愛げなさつま緋の紺の褪せない筒袖をきていた。そとへ出ると、かれは歳太郎と少年とに別れた。

十二階から吉原への、ちょうど活動館のうしろの通りの、共同便所にならんで、いつも一台の自動車やすが憩やすんでいた。晩の十二時ごろからどうかすると明方あけがたの一二時ごろまで、いつも決つたように休んでいる自動車はめつたに動いたことがなかった。何時の間にやつて来て、いつ動き出すか分らないが、きまつたように窓窓にカーテンをおろしながら、街燈と街燈との間の暗みに、にぶい玻璃窓ガラスを光らしながら置かれてあつた。

それに又、ふしぎなことには、ただの一度も運転手の姿を見たことがなかった。どういふときでも、誰かが修繕をしながら一と走りに機械でも取りに行つていふように、人氣も

なく、あざらしのような黒い光沢のある自動車の全体が、しんと静まり返って、空^{から}ツ風^{かぜ}のなかにじつとしていた。

かれは、そこにある柏の並木の黄葉がぼろぼろ落ちる夜なかに、一度、ふとした好奇心から通りとは反対の、溝のある方のハンドルのそばから内部を窺き見たことがあった。

そのときかれは殆ど叫び出そうとする位の驚きに、おもわず自分の口もとを自分の手で塞いだくらいであった。——ちようどかれが忍びよりながら、夜目にも自分の姿をうつす漆塗りの胴ツ腹から、そつと玻璃窓内を覗^{うかが}うたときに、内部の深緑色（その晩は天鷲^{びろうど}絨のような黒味をおびていた。）の窓帷^{カーテン}がどうした途端であったか片絞りをされて二寸ばかり開いていたのであった。そこからかれが視線を流しこんだとき、かれは、いきなり喉を締め上げられたように吃^{びつ}驚したのである。なぜだといえ、あかりを消した内部に陶器のような白い女の肉顔が、まっすぐに坐っているせいか、じつと動かないで据えられていたからであった。

しかもその瞬間に、かれが第二の驚きの声をあげようとしたのは、その女の顔とすれすれに又別な男の顔を見出したことであつた。ちようど二つの白い瓜をならべたような姿勢が、内部のあるかないかの、恰^{あた}も通^かりからカーテンを透してくる明りがぼんやりしている

のに浮きあがっていたからである。女の顔はくつきりと白く鮮やかな輪廓をもっていた。かれはこうした予期はしなかったが、このふしぎな自動車のなかに女の肉顔を見いだしただけでも、かれの靡爛びらんしつくしたような心をどれだけ強くゆすぶったか不明わからなかった。あり得べきところにあるものとはいえ、しんと静かな内部に鰈かれいのように白く泳ぎ澄んでいるような彼女の顔は、変態なかれの情痴をぶちこわして了ったのである。

女はその服装の華美な点から言っても、毛皮の襟巻をしているところから見ても、やはり女優のような妖艶さと押し出しをもっていた。第一、かの女の目はくらやみのなかでも、曇り硝子ガラスのようなくすんだ光をもつて見えたのである。男は服をきていた。黒のソフトを深くかむっていた。かれらは黙っていた。話し声も何もしなかった。ただ、そうしているのは、葉巻でも買いにやつたらしく思われる運転手の帰ってくるのを待っているものかと思われなかったのである。けれども運転手は十分二十分経っても帰って来ないばかりか、それらしい姿さえ見せなかったのである。

かれはその時咄嗟の間に、ある不思議な神経的な誘惑をかんじた。

「いったい何をしているのであろう。話し声もしなければ煙草ものんでいない。唯ただうごかずには白い瓜のように併んでいるのは変だ。何か本でも読んでいるのか。」

そう思つて氣をつけても、それらしいものが膝の上にはなかったが——かれは、そのとき突然にドアから驚いて飛び退いたのであつた。何者かがいてハジキ飛ばしたように、かれはかれのからだを溝からすぐに人家の裏口になっているところの、とある家と家との隙間に身を潜らせたのであつた。かれはかるとき、得体のしれない蒼白いものの折り重なつていたのを感じたのであつた。

二三分の後に通りとは反対の（ちようどかれの方から正面に見えるところの）漆塗うるしぬり

のドアに、一本の生白い手がすうと迂すべり出たかと思うと、ハンドルの把手につかまつて逆にねじられた。重そうで厚いドアが、さも輕輕と音もなくひらかれた。そこへなりの高い女が、ぱつと飛び下りると続いて服をきた男が下りた。かれらはあたりを見廻して暗い通りを足早に歩いて行つた。そのとき烈しい香料の匂いが、溝の臭氣あつを押しながら、ふうわりと羅うすもののように漂いながら匂つていることをかんじた。

かれは、これらの不思議な場面に、胸を小突かれてなお暫しばらく立ち止つてしていると、どこから現われてきたのか、一人の運転手が自動車のそばへ近づくと直ぐに運転台上上つたのである。間もなく、このあやしげな自動車はゆるゆると動き出して、俵町の方へひと廻りすると、やや早く馳り出した。と見る間にその自動車はかげのように消えてしまったのである。

る。

かれは人家の隙間から飛び出すと、何気なく自動車のタイヤのあとを見たりしていたが、又ぼんやり歩き出した。かれは眼底にうかんでくる様な映像に悩まされながら、脳は重く心は疲れていた。かれ自身が何故に忌むしいこの巷の毎夜をぶらつかなければならぬかということも、又そうすることに依つて彼自身の内部が益益荒^{こうたい}顔してゆくことをも考えなかつたのであつた。かれは、総ての荒んだ独身者や失業者、また一切の無能者の当然辿るべき道を歩いているに過ぎなかつたのである。

かれは間もなく、殆ど幽霊のように樹立^{こたち}から樹立を縫いながら公園をあるいていた。かれ自身何の目的もなく、多くの用なしとともに其処のベンチにもたれていたのであつた。かれの前から半町ほどさきから、かれが曾^かつてきき覚えのある唄い声がきこえてきた。よく見ると、とある木立のかげに瓦斯を点しながら、三四十人の群衆にとりかこまれて、れいの卑俗なセンチメンタリズムが今さかんに弾き唄われているのであつた。かれはその時すぐ街頭音楽者のむれを思い出した。それと同時に、

「誰に顔を見られたつて最う何とも思いませんよ。恥も此処まで落ちてくれば落ちつくものです。」れいの爺むさい顔をして言つたことを思い出した。かれはベンチを離れると群

衆の方へむかつて歩き出した。

歳太郎は自分で弾きながら、れいの沈んだ声で、ときどき故意と悲しげに長くひいたり、群衆の顔をいちいち眺めたりしながら唄っていた。少年は、ぽつねんと跼しゃがんで、右の手に刷り物をもって手持無沙汰に歳太郎の顔と群衆の顔をかわるがわる見くらべていた。

かれは群衆の人垣の間にはさまれながら、しばらく聞いているうちに、均しく群衆が悲しげにすすり泣くヴァイオリンを、あたかもうつとりと聞きとれているもののように思えた。歳太郎はもちろんかれには気づかなかつた。弾き終えると、少年はもじもじした声で、人垣をぐるぐる廻って、

「ご入用の方はありませんか。一冊十錢ずつです。唄は節づきでこのなかへ皆おさめられ
てあるのです。」と言つては、刷り物を人の目のさきに突き出して引っこませた。うす暗
い群から「ここへ一冊。」という変な声で買うものがあるかと思うと、また反対の隅の方
から鼠のような声で「こつちへも一冊。」と声がかかった。

歳太郎は買手がつくと、きゆうに大声で怒鳴つて、

「たった十錢で唄は残らず入っているのです。今のうちに、売りきれないうちに。」と急せ
き立てていた。そしては群衆越しに、あちこちに不安そうに眺めては、少年を急がしてい

たのである。それは公園廻りの巡査に追い立てを食うので、それを予覚しながら素早く刷り物売り捌くのであった。

見ているうちに八七冊売れると、群衆はだんだんに散りはじめた。黒黒とした人垣の輪が一人ずつ引つpegがされて、最後の四五人になるまで歳太郎はしつこく売りつけていたが、そのとき突然にかれは鋭く少年を呼んで手を振って、

「瓦斯を消してしまえ。」と叫んだ。少年はすぐ瓦斯を吹き消そうとしたが、なかなか消えなかった。歳太郎は何か言いながら、ふっと慣れた口つきで消した。

「早く逃げないと駄目だよ。早く瓦斯ランプを畳むんだ。」

歳太郎は手早く刷り物を風呂敷包みにたたんだ。そして二人は観音堂の方へ急いで人込みのなかへ隠れて行つたのである。かれはそれを見ているうち、果して一人の巡回の警吏が靴音をしのびながら歩いてくるのを眺めた。

所在ない日夜の彷徨は、至るところの街路や裏町にかれの姿を浮きあがらしていた。かれは何のために毎夜のようにほつつき廻らなければならぬかということを問われたなら

ば、一言答えることが出来なかったであろう。かれには理窟なしで、ひとりでにその足はいつも雑踏の巷に向くのであった。そのうち冬は完き^{まつた}までに、この巷の公園の樹の肌に凍えつき、安建築を亀裂^{ひび}らせるような寒さを募らした。

或る晩、かれは十二階のラセン階段を上って行つた。いつかは昇つて見ようと思ひながら、一度も昇つたことがなかったのである。かれの予測した古い黴^{かび}のような匂いや、埃のむれや、至るところに不思議な軋り泣きする階段をおもしろく感じた。何かしら彼の好奇心をそそるような寂然とした自分の足音の反射、またかれと同じようにこの塔を見物するために上つた少女のむれなどが、かれに奇怪な或る幻像を編み立てさせたのである。

かれは第九階にまで昇りつめたとき、その壁にさまざまな落書が鉛筆や爪のあとで記されてあるのを読んだ。地方人らしい見物の人人がその生^{しょう}国^{こく}をかいいたり、年号を記したりしてあるのがあつた。なかには北海道とか日向国などがあつた。爪のあとには埃が溜つていて、鉛筆のあとも消えぎえになつているのもあつた。「われは笈^{きゅう}をみやこに負い来れど、いまわれ破れてむなく帰る」とか又は「ここよりして、遠く故郷の空気をかぐ。此処よりしてわが願ひは空し。」などと記されているのがあつた。それらの都会の落伍者はかれはかれ自身の上にも感じるのであつた。都会を去るもの去ろうとして悩むものが、

かれの目にありありと考え出された。あるいは「明治四十五年十月五日武島天洋。」などと無意味にかいてあるのもあった。ただ、その年号というものが奈何いかに寂しくあたまにひびくことであろう。かれは暫くぼんやりと眺めていたとき、すぐ歳太郎の爺むさい顔をおもい出した。

かれが頂上に昇りつめたとき四圍の窓窓がすべて金網を張りつめられ、そこから投身できないようにしてあった。風は烈しかった。かれはそこから公園一帯の建物と道路と電燈のむらがりとを見おろした。道路には蟻のように群れた通行人のうごめく黒い諸諸の影が、砥といしのように白い道路の上に、伸びちぢみしながら、あるものは水の上にあるもののように、あるものは鳥のように蠢いてみえた。そこには電燈がいたるところに悲しげに点れていた。あたかも人影と人影との間に、建物と建物とのまわりに煌こうぜん然として輝いていた。かれはそれを眺めているうちに、恰も射すくめられたような一羽の鴉が舞いおちるように、かれ自身がいま地上へ向けて身を投げることを思いいたった。

そのときかれは既に地上に、ヘシ潰されたようになって、道路の上につつ伏していた。ひとびとは黒黒とかれのまわりを取り巻いたがかれはもはや呼吸を切らしていた。そこまですごいとき、かれは金網につかまっている指さきが余りに強く掴まっているために痺しびれて

いることに気がついた。

「おれのようなやくざな人間の死も死にあたいするであろうか。おれの投身はきつと群衆を駆り集めることはできるであろう。今まで平和でいたひとびとの表情をしばらくは掻き乱すことはできるであろう。しかし次の瞬間には、ただ何事もなく、波紋のおさまるよう
に人人は又平気で、先刻に考えていたことを更に考えつなぎ、愉快するものはその方へ急いでゆくであろう。そこにおれは何の値せられるものがないのだ。」かれはこう考えたとき、あとから来た少女のむれも怖そうに地上を見おろしながら小鳥のように囁ささっていた。

「わたし此処から飛び下りて見たいわ。死んじまうでしょうか。」と、その少女は、そばにいた最もつと大きい少女にたずねた。

「え。きつと死ぬわ。あら危ないわ。そんなにそばへ行つては——。」と、うしろから小さな少女の肩を抱きすくめてやっていた。

かれは、何気なかったが次第に蒼ざめながら立っていた。このふたりの少女をおれが地上まで連れて行ったら、この階上から、飛び下りたら、そしたら或いは、ひよつとするとおれは……などと悩ましげに考え込んでいたのであった。

そのとき初めて少女達はかれの姿をドアと金網との間に見出した。かの女らの平和で斑

点ひとつない顔は、すぐかれの蒼ざめた相貌から移しかえられたように、そつと變つて青ざめたようであつた。すくなくとも、その不安な顔いろは、かれが何者でもないものであることを知悉ちしつしながら、なおこの空中にある自らの優しいからだを護るためにしだいにして退ずさりして行つた。

「おれは怖がられている。おれは彼女らから見れば何という荒い容貌をしていることだろう。」かれはそう考えると、くるつと反対を向いて、烈しい夜ぞらに鋭く光る星座のあらゆる光をあびた。寒かつた。それは殆ど痛みをかんじるほど寒かつた。

しばらくすると彼女らは慌しく階段から下りる音がした。それをきいた時かれは初めて安らかな心持になつた。何もできはしない。しかしかれはかれの内部にうずいているものを恐れていた。五六分は過ぎた。しかしそのときかれは突然に金網の方へ走つて見た。

「おれはこういう風に走つてみるがいや決して投身するのではない。そういうおれは馬鹿ではない。唯こうして走つてみるだけだ。」と自分を制しながら、金網の破れたところを引ツ搔かいていたのである。張りつめた金網はふしぎな金属性の音響を立てて、きみわるくドアの内側にまでひびいた。そのとき初めてそこにいた番人をかれは目にいれたのであつた。その老人は静かに出てくると、かれの冷たい手をおさえた。

「そういう乱暴をなすつてはいけません。それを破いてはいけません。」と、凡ての老人がもつ皺枯れた声で言つて、かれの上から下をじろじろ眺めた。かれは殆ど機械的にぼんやり見返すと、

「乱暴とは……。」と、なに気なく言つたのである。老人は狎なれたように微笑つて、そつと近よると、

「だいぶ永くそこにいらつしやるじゃありませんか。此処は高いところですよ。俗にいう魔が射すというようなこともありますからね。さあもうお降りなすつたらいいでしょう。」

そう言いながら、しずかに彼の背なかを押すようにドアのうちへ誘ひ込むのであった。かれは黙つて老人のする通りにしていた。階段の入口へまで送つて、

「ずつと下りなさい。わき目をふらずに下りなさい。」と言つてくれた。

かれは腰から下がふらふらになっていることを感じた。目まいが酷ひどくなると却かえつて肉体が酔うものであることを初めてかんじたのであった。かれは階段をいくつも下りながら考へていた。「おれはあの老人から止められたほど変になつていたのであろうか。すくなくとも然そう思わせるだけのものが、おれの目つきにあらわれていたであらうか。」と思うと、ふしぎに彼の塔あの上にくると、誰でも高いところに登つたものは一度飛び下りてみたらと、

ふいとわけなく然う考えるように、れいの「魔がさしてくるのであろうか。」それとも、あの老人が何かしら塔の上にくる人人の顔いろによつて、そのひとが何を目的にして登つてきたかがわかるように習慣づけられているのであろうか。と、かれはぎつしりしぎつしりと階段を下りながら思い悩んでいた。一つの階段ごとに一人の番人がいて、卓子^{テーブル}に向つていた。そのたびにかれは淋しい時計が静かな室内にときを刻んでいるのをきいた。番人らはかれの異常にあおざめた顔いろと、その変につかれた足どりとを目にいれると、またつぎの階段の入口で消えてゆくのを眺めた。ふしぎにこれらの階段の幾つとない入口から入口へと消えてゆくものが、昼となく夜となく打続くことで、誰も昇つたものがない筈の階段を不意にきしまして、誰かがうしろから歩いてくるような気がして仕方がなかった。そうかと思うと、反対の階段からもぎしぎし昇ってくる足おとが微^{かす}かにしてくるのであった。まるでそれは入れかわり立ちかわり、絶え間なく影燈籠のようになると廻っているように思われるのであった。かれはしまいには幾つの階段を上つたり下つたりしているか分らなかつたのであった。目がふらふらしてきたのである。しかも手すりの真^{しんちゆ}鍬^うをつかまりながらいるので、手はだらりと冷たく凍えあがつたように垂れていた。そのとき番人はあわてて、

「入口はそちらですよ。飛んでもない。窓から転げおちますよ。飛んでもない。」そう言いながら、麻のような手つきで階段の下り口を指さした。河馬かばのような大きな入口は、かれの方にむかつて、窓あかりに浮きながら開かれていた。

「そうですか。そちらでしたかね。」と、かれも慌てて歩き出して行つた。と思うと、かれは、たしか七階目を下りた筈なのに、まだ八階目にいたのであつた。窓外から吉原の灯つづきがぼんやり見えた。かれは恐ろしくなり出すと馳け足で下りはじめた。足音は相湊かわあらず次から次へとつづき、背中をはいてくるのであつた。

かれは、しまいに堪らなくなつて、そこにいた番人に問うた。

「いったい此処は何階目なんです。さつきから考えてもわからないんですが……。」番人はじつとかれの顔をみつめた。その目はうごかなかつた。かれもしばらくじつとしたが、顔が乾いて熱が出てきたような気がした。

「ここは七階目ですよ。あなたは先刻から此処を一体何の気でかけ廻っているんです。気味の悪い方だ。さあ、ここが下り口ですよ。」番人は気短かそうにかれを下り口へつれて行つて、押すようにしながら鈍い声で、

「此処からわき目をしないで下りなさい。窓を見ないで。」

そう言つて引きかえして行つた。かれはその通りにした。いくつも階段を下りて行くうちに、ある番人は湯気のあがつた鉄瓶からいま茶をいれようとしているのが、ほとんど夢のように遠くながめられた。かれは、そこをも息をもつかずに下りた。

三分の後かれは、とんと足の裏を小突かれたような気がした。気がつくとかれは、道路の上に立つていた。足のうらがしいんと脈打つていた。かれは、そのとき思わずふり仰ぐと、このふしぎな古い塔のドアがみな閉められはじめた。

その塔はあたかも四囲なる電燈の海にひたつてゐるため、影というものがなく、呼吸いきのんで立ちあがつていた。しかもかれが再び見あげたとき、ふらふら目まいがしそうになつて一種の悪寒をさえ感じたのであつた。

かれは、それから間もなく或る不吉な冬の夜の出来事に会合した。いつものように歩いてゐたとき、公園全体の人込みがみな塔の方へ向いて走つてゆくことと、そのなだれが塔の根の方を黒黒と染めたこととであつた。

かれは端はしなくその晩、いつかの電気娘が塔の上から投身したことを聞いたのであつた。

かれが駆けつけたときは既うその死体は運ばれてしまつて、群衆も次第に散りはじめたころであつた。かの女が何のために投身したかすら判らなかつたが、かれは三四度かの女を見ただけの理由で、或る悪寒と哀惜とを同時にかんじた。しかもあの純白な皮膚がかれの目の前から去ることもなく、いつまでもかれにこびりついていたのである。

それから幾晩かのあとに、かれは、塔のふもとの空地で彼のまずしい街頭音楽者らがヴァイオリンを弾きながら唄っているのを聞いた。かれは人込みのなかに佇んで、永い間歳太郎の顔をながめたのであつた。なぜ歳太郎がこんな寂しい土地を選んだかというより、その日、かれはかれ自身が音楽者のむれに身を投じようかとさえ思うくらい、消極的の無為な或る淋しい観念にとらえられていたのであつた。人人が散りはじめたときに、かれは歳太郎の肩を叩いた。歳太郎は驚いて、そして、

「先刻から君はきいていたんですか。僕のうたつてたのを——。」と言って、顔をあからめた。

「いや別に聞いたわけでもないが、もう止めるのかね。」というと、歳太郎は瓦斯を消して、れいの少年に風呂敷に包ませると、暗いところを選んで跣んだ。

「こんな晩はいけないですよ。なんだか陰気でね。一人寄つたかと思うと、二人行つた

り、しまいには、ばらばらに四五人も固まって散ってしまつて、てんで唄う気がしないもんですよ。妙に神経的なものでしてね。そういう晩は初めから——そう、宿を出てくるときから解るような気がするんですよ。」

歳太郎はそういうと、爺むさい顔をなお陰氣にくもらせた。かれは、いくらか元氣をつけるように、

「もう一度やつて見るさ、第一此処は場所がわるいんだよ。暗いしじめしめしているしね。」と言つて、かれはふいと塔の方へ目を走らせた。八角に削り立てられた尖端せんたんに、何かが引つかかっているような気がして仕方がなかった。

「場所も悪いが……今夜はもうだめです。寄つてくる奴がみんな影のうすい奴ばかりなんですから——それに、今夜は妙に腹の減つたような人間ばかりだったんですよ。あそこの瓦斯燈のせいもあったが、蒼白くへんに皆のかおが歪んで見えてね。」と歳太郎は言つて、ちよいと瓦斯燈をながめた。その下を一足の黒い犬がすたすたと歩いて行つた。瘠せた骨立つた犬であつた。

かれはその時まで今も話そうかと思ひながら、もじもじしていたが、ふいに口をすべらした。

「昨日ここに身投げがあつたというじゃないか。知っているかね。ちようどこのあたりだよ。」

かれはそう言いながら、老人の頭のように生えた雑草を見た。歳太郎はいやな顔をしたが、

「うん知っていますよ。さつきから私もそれを考えてたんです。ああいうことがあると商売がきつと甘く^{うま}ゆかないものですよ。」と言って、煙草をつけると、

「私どものように外で商売をするものは、身投げなどに縁起をとるものでしてね。今夜も宿を出るときは此処でしないことに考えていたんですが、いつの間にか始めてから気がついたんですよ。」と言って、かれは寒そうに肩をすぼめた。れいの少年はやはり歳太郎と同じ姿勢で跼んで、こつこつと石と石とを叩いていた。乾いた変な音がして気になって仕方がなかった。歳太郎もやはり気になるようにちよいちよい振り顧ったが、少年はそれに気づかないで叩いていた。

かれも歳太郎も黙っていたが、ふいに、歳太郎はこう尋ねた。

「あの女を見たことがありますかね。白い顔をした——。」と言いながら、ちらと暗い目つきでかれの顔をながめた。

「二三度見たことがあるんだ。そこらの通りでね。」

かれは、いつか彼女がにんがりと微笑つて行つたことを思い出した。それきり又かれらは黙つていた。

少年は依然として石をこつこつ叩いていた、乾いた音がした。

「おい、そんな変な音を立てるなよ。詰らない。」

歳太郎は神経的に言う、音はすぐ歇やんだ。それきり話が女のことに移らなかつた。

明るい通りへ出ると、歳太郎は真蒼な顔をしてかれに囁いた。そこは恰ちやうど度玉乗小屋の前で、すれちがいに行く女がいた。紛うかたもない例の女のすりとした姿で、頸首もすつきり白く浮いていた。

「あの女が行く。何んという変な晩だ。たしかにあれにちがいない。」と歳太郎は叫ぶように言つた。

かれはその時総身に或るふしぎな顫せんりつ律をかんじた。かれの眼にもはつきりとその姿が見えたからであつた。どこか西洋人のような足早に歩いてゆく姿は、いつかの待合の小路で見たのと少しも異つたところが無かつた。併しかし彼の女あが生えているわけがない。あの女はたしかに投身したのだ。と思つても、やはり似ていた。かれは歳太郎の言葉をさえぎるよ

うにして、

「あの女が歩いている筈があるものかね。いま時分、しかも死んでしまったものが歩いているものか。」

歳太郎は胸をどきつかせながら呼吸をきらして、

「しかし変だ。たしかに似ているのだ。」

と、またあとを振り顧つた。群衆は絶え間もなく、つぎからつぎへと動いていた。一とところに溜るかと思うと流れ、流れるかと思うと、それが又ぞろぞろと溜つたり激んだりした。

かれは、そのとき突然にある思念に脅やかされた。若しも、ひよつとすると……と思ひながら口を切つた。

「君はあの女をだいぶさきから知っているのかね。君の木賃から近くにある彼の女の宿を君は知っているのだろう。」

歳太郎はそのとき顔いろを変えて、かれの顔を見つめた。それは紙より白く顫ふるようになる。二分ばかり黙っていたが、

「だいぶ前から知っては居るんです。しかし……。」と言って、
躰つまずいたように黙り込

んでしまった。かれも黙って歩きながら、次第に心持まで蒼ざめるような或る予覚のために震えをからだの凡てに感じ出したのである。あの女が噂のように妊はらんでいたとすれば、そうして腹の子が彼女が地上に飛び下りたときに、蛙のようにヘシ潰れていたということが実際だとすると……かれはそう考えるとちらと、歳太郎をみたとき、かれは極度の恐怖と不安ともつかない或る不思議な悪寒とに脅かされた蒼白い顔を偷み見たのである。

かれはそのとき又背後に大きな重い十二層の建物がのっそりと立ちあがっていることを何気なく感じた。射落された鴉のような姿をも、その塔の上から飛とびお下する姿を、一切が衰弱したかれの神経のうえに去来する影をも。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 室生犀星集 童子」ちくま文庫、筑摩書房

2008（平成20）年9月10日第1刷発行

底本の親本：「室生犀星全集第二巻」新潮社

1965（昭和40）年4月15日

初出：「雄辯」

1921（大正10）年1月号

入力：門田裕志

校正：岡村和彦

2014年3月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

幻影の都市

室生犀星

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>